

サバティカル@シンシナティ

同志社大学心理学部 教授

竹原卓真 (たけはら たくま)

2014年4月から1年間、米国オハイオ州シンシナティ大学で在外研究を行いました。私の研究テーマは認知心理学と複雑系心理学に関するもので、滞在中は最先端の研究に触れることができました。

複雑系とは一体どのような研究テーマなのかと疑問に思われる方も多いはず。複雑系は、互いに関係し合う非常に多くの要因がその全体として何らかの振る舞いを見せる系として定義され、天気や地震発生のメカニズム等の自然現象から、我々が日常使用する言語等の認知機能に至るまで広く存在します。また、一時流行った「カオス」や「フラクタル」は複雑系の中心概念で、ある対象物を拡大しても決して単純なものに還元されないという特徴や、初期値のほんの僅かな違いが極めて大きな差を引き起こすという特徴があります。言わば、現在主流である還元主義的科学と正反対で、複雑なものは複雑なまま理解しようという立場を取ります。心理学では要素還元主義に対するゲシュタルト心理学のような立場というのが近いかもしれません。

そんな複雑系をベースとする複雑系心理学は、残念ながら日本では馴染みが極端に薄いのが現状です。そのため学会では両隣の発表が大盛況なのに、私の発表はいつも閑古鳥が鳴くという悲しい現実と直面します。しかし、私が滞在した複雑系心理学の総本山、シンシナティ大学では世界中から数多くの複雑系心理学の研究者が集まり、チームに分かれて活発に研究

が進められるとともに、定期的にランチ・トークが開催されて研究の深化がはかられていました。それらのチームを統括していたのが、反応時間分布と複雑系の関係を実験検証する第一線の研究者であり、私の受け入れ先となったジョン・ホールデン教授でした。彼は、複雑系心理学は最近生まれた領域なのでアメリカでもまだ十分に浸透していないことや、そのためラボでいくつかのチームを組んで力を合わせて研究を押し進めていること、あるいは論文査読で直面する苦労話など、様々な事情を話してくれました。複雑系心理学の論文著者の多くがアメリカ人であるため、アメリカでは十分に浸透していると勝手に思い込んでいましたが、予想に反する現実を知ってとても驚きました。また、実際の研究事情は伝聞や予想ではなく、自分の目で直接確かめることが重要であるとも感じました。

ホールデン教授の研究への取り組みを見ていると、チームで研究を推進することの重要性や高い生産性に気づかされます。集合知に優るものはないとよく言われますが、チームで多くの研究を同時進行し、互いに議論し合っている光景を見ると、集合知の重要性を再認識します。また、レベルの高い論文が頻繁に投稿されており、生産性の高さも顕著です。さらに、ランチ・トークはとても有意義でした。シンシナティ大学には年間を通して全米から多くの研究者が訪れ、ランチ・トークで最先端の研究を1～2時間、ハンバーガー



Profile—竹原卓真

2001年、同志社大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程満期退学。博士（心理学）。北星学園大学社会福祉学部専任講師、助教授、同志社大学心理学部准教授を経て現職。専門は認知心理学、複雑系心理学。著書は『SPSSのスズメ（1・2）』（北大路書房）、『顔研究の最前線』（共編著、北大路書房）など。

を食べながらフォークを指示棒代わりにするなど、フリースタイルでトークします。月2回の割合で開催されるこのトークは院生を含めたラボの全メンバーが最新の研究に触れたり、研究者ネットワークを広げたりする上で大切なイベントです。身近な環境内で世界最前線の研究話をたくさん聞けることや、トップジャーナルに論文を掲載している有名な研究者から直接アドバイスをもらえることは、非常にエキサイティングな経験であり、在外研究での大きなアドバンテージでした。

1年間という限られた時間でしたが、複雑系心理学の研究はもとより、研究先進国アメリカの研究事情や直面している問題を理解できたことは、私の研究人生にとって貴重な体験となりました。今後はシンシナティで吸収した多くのことを参考・活用しつつ、学会発表では閑古鳥が鳴かず、そこそこの人数の研究者に訪れてもらえるような研究を地道に発表し続けたいと心に誓っています。